

【背景】

日本には古くから桜に親しむ文化があり、桜は春を象徴する存在として多くの人に愛されている。茨城県桜川市は、ヤマザクラ・カスミザクラ（以下、生物学的な種を指す場合にはヤマザクラ類、景観として捉えた桜を指す場合には漢字で山桜と表記する）の群生地として有名で、「西の吉野，東の桜川」と称され古くから人々に親しまれてきた。筑波山地域ジオパークのなかでも、高峯地域は山桜の名所としてジオサイトのひとつに含まれており、現在も春になると多くの観光客で賑わっている。当市では、2017年に策定された桜川市第二次総合計画のなかで「ヤマザクラと市民の幸せが咲くまち 桜川」をテーマに日本一のヤマザクラの里の再生を通じた町づくりが進められており、山桜に対する市民の関心は一層高まっている。しかし、燃料革命や化学肥料の普及によって、人による里山の利用が減り、全国的にはヤマザクラの群生地や更新適地の減少が危惧されている。そこで、筑波大学修士1年の勝田翔は、桜川市やジオパークにとって重要なヤマザクラ類が将来も継続して生育できる環境の把握を目的として、本研究を行った。

【方法と結果】

桜川市内の筑波山系を中心に、ヤマザクラ類が生育する森林を12カ所選び、胸高直径（dbh）が2cm以上の樹木を対象に、種名とdbhを記録した。調査の結果、景観を維持するうえで重要なヤマザクラ類の幼木（dbh<9cm）の出現状況については12地点の調査地の中でも違いがみられ、そのうち3ヶ所の森林ではヤマザクラ類の旺盛な更新がみられた。

次に、ヤマザクラ類の幼木の多少が、どのような森林特性と関係があるかを調べるために、森林特性とヤマザクラ類の幼木の個体数との関係を解析した。その結果、ヤマザクラ類の幼木個体数は萌芽率と性の関係を、アカマツ枯死木数とは負の関係が示された。

また、複数の調査地に出現した種の個体数データを用いて、調査地ごとの種組成を比計量多次元尺度構成法（NMDS）によって解析した。その結果、幼木が多く生育していた森林とそれ以外の森林との間に明瞭な種組成の違いは見られなかったが、更新が起きている調査地にはコナラ、アカマツ、クリ、シラカシなど、関東地方の二次林によくみられる種や、アカメガシワ、ヤマウルシなどの先駆種が生育する傾向にあった。

【まとめ】

ヤマザクラ類の幼木の個体数と萌芽率との間に正の関係が検出されたこと、また、幼木が多くみられた調査地は、関東地方の二次林の主要構成種が生育していたことから、伐採を伴う里山管理はヤマザクラ類の更新を促進するものと推測された。桜川市が古くから山桜の名所であり続けたのも、地域の人々による里山の利用が継続して行われてきたためだと考えられる。一方、筑波山系で起こった松枯れは、林冠木の枯死という大きな攪乱をもたらすもののヤマザクラ類の更新を即座に促すわけではないことが示唆された。これらのことから、桜川市の山桜の景観の保全には、かつての里山林で行われていた定期的な伐採を伴う森林管理が必要であると考えられる。

キーワード：ヤマザクラ，カスミザクラ，森林景観，更新，萌芽，里山